

## 要旨

学んだことを自分のものとするためには、自分の文脈に取り入れる、つまり、経験として学ぶ必要がある。しかし、これまでの学習経験を振り返ってみると、順序立てた説明をされているのに頭に入りにくい、あるいは、関係があるはずなのに教えられることが自分自身の課題と結びつかない、というようなことがあるのではないだろうか。学校や講座によって提供される教育カリキュラムは、学習者の文脈に沿うというより、どちらかと言えば、一般性、専門的分化、論理的形式化という特徴を備えている（デューイ 1998）。つまり、学習していることがなんとなく頭に入りにくいというような学習者の実感は、教育カリキュラムと学習者の学びの実情のずれから生じていると言えるのではないだろうか。

本研究は、このような問題意識から出発し、熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻で提供されている SCC (Story-Centered Curriculum) (以下、熊大 SCC) を題材とし、ストーリー型学習の文脈と個人の文脈との関連を見つけ出すことを促すためのアドオンの提案を目的とするものである。本研究では、学習者ひとりひとりに合わせたストーリー開発が現実的でないことから、ストーリーの文脈を変えることなく、機能強化を行うことを目指している。なお、提案するアドオンとは、あるソフトウェアへの追加機能を持つソフトウェアには限らない。補助的なドキュメントや仕掛けなども含むものとする。

まず、アドオンの開発指針を得るために、熊大 SCC の学習経験者を対象に 3 つの調査を行った。1 つめは、熊大 SCC 学習者が SCC を体験しながらその設計方法を学ぶ「統合型カリキュラム設計演習」に記したリフレクションデータの分析である。2 つめは、熊大 SCC 学習者へのアンケート調査、3 つめは、より具体的な学習方法等を知るためのインタビュー調査である。これら分析・調査より、「SCC を実務へ近づけるしくみ」「与えられた業務へ着目させるしくみ」「同級生 (同僚) と関わるしくみ」「SCC に慣れるしくみ」「ペース配分をきめ細かく行うしくみ」というアドオンの着目点があることが明らかになった。

これらの観点をもとに、「熊大 SCC への準備を補強する」「進捗管理を支援する」「共有へ取り組みを促す」という 3 つのコンセプトを作成し、「a. 季節の行事」「b. 入社・退社・休憩中などの表示」「c. 週報と社内ミーティング」について、具体的なアドオンを提案した。これらは、コミュニケーションを均等に配する機会を作り、また、コミュニケーションを活性化することをねらいとしている。これらのアドオンは、ストーリーの文脈を変えることのないものであり、さらに、ストーリー学習が提供する文脈と個人の現実の文脈との関連づけを促すことが期待できる。

本研究では、熊大 SCC 学習経験者を対象とした調査からアドオンの提案までを取り扱っている。今後は、アドオンを使用し、その効果を確かめることが求められる。